

## 0.1 H26 数学選択

[A] (1)  $\varphi: \mathbb{C}[x, y] \rightarrow \mathbb{C}[z, \frac{1}{z}]$  を  $\varphi(x) = z, \varphi(y) = \frac{1}{z}$  として定める.  $\varphi$  は全射準同型である.  $\ker \varphi \supset (xy - 1)$  は明らか.  $f(x, y) \in \ker \varphi$  とする.  $f(x, y) = (xy - 1)g(x, y) + p(y)$  ( $g \in \mathbb{C}[x, y], p \in \mathbb{C}[y]$ ) とできる.  $\varphi(f(x, y)) = \varphi(p(y)) = p(\frac{1}{z}) = 0$  である. よって  $p = 0$  であるから  $f(x, y) \in (xy - 1)$  である. したがって  $\ker \varphi = (xy - 1)$  である.

すなわち  $\mathbb{C}[x, y]/(xy - 1) \cong \mathbb{C}[z, \frac{1}{z}]$  である.

$\mathbb{C}[z, \frac{1}{z}]$  の商体は  $\mathbb{C}(z)$  であるから  $\mathbb{C}[x, y]/(xy - 1)$  の商体は  $\mathbb{C}(z)$  と同型である.

(2)  $\mathbb{C}[z]^\times = \mathbb{C}^\times$  である.

また  $\mathbb{C}[z, \frac{1}{z}]^\times = \{cz^k \mid c \in \mathbb{C}^\times, k \in \mathbb{Z}\} \cong \mathbb{C}^\times \times \mathbb{Z}$  である.

すなわち乗法群が異なるから  $\mathbb{C}[x, y]/(xy - 1), \mathbb{C}[z]$  は同型でない.

(3)  $\varphi: \mathbb{C}[x, y] \rightarrow \mathbb{C}; \varphi(x) = a, \varphi(y) = b$  とする.  $\varphi$  は全射準同型である.  $\ker \varphi \supset ((x - a), (y - b))$  は明らか.  $f(x, y) \in \ker \varphi$  とする.  $f(x, y) = (x - a)g_1(x, y) + (y - b)g_2(y) + r$  ( $g_1, g_2 \in \mathbb{C}[x, y], r \in \mathbb{C}$ ) とできる.  $\varphi(f(x, y)) = r = 0$  である. よって  $f(x, y) \in ((x - a), (y - b))$  である. したがって  $\ker \varphi = ((x - a), (y - b))$  である.

すなわち  $\mathbb{C}[x, y]/((x - a), (y - b)) \cong \mathbb{C}$  であるから  $((x - a), (y - b))$  は極大イデアルである.

(4)  $xy - 1 \in ((x - a), (y - b))$  なら  $xy - 1 = (x - a)g_1(x, y) + (y - b)g_2(x, y)$  とできる.  $x = a, y = b$  として  $ab = 1$  である.

逆に  $ab = 1$  なら  $xy - ab = (x - a)y + (y - b)a$  とできるから  $xy - 1 \in ((x - a), (y - b))$  である. すなわち  $ab = 1$  が必要十分条件.

[B] (1)  $\mathbb{Z}$  は UFD でありその商体は  $\mathbb{Q}$  であるから  $\mathbb{Z}[x]$  上既約な多項式は  $\mathbb{Q}[x]$  上既約である.

$x^4 - 2$  はアイゼンシュタインの既約判定法から  $\mathbb{Z}[x]$  上既約である. よって  $\mathbb{Q}[x]$  上既約である.

(2)  $x^4 - 2$  が  $\sqrt[4]{2}$  の最小多項式であるから  $[L : \mathbb{Q}] = 4$  である.

(3)  $x^4 - 2 = 0$  をといて  $x = \sqrt[4]{2}, i\sqrt[4]{2}, -\sqrt[4]{2}, -i\sqrt[4]{2}$  が  $\sqrt[4]{2}$  の  $\mathbb{Q}$  上の共役である.

(4)  $L \subset \mathbb{R}$  より  $i \notin L$  であるから  $L/\mathbb{Q}$  は正規拡大でない. よって Galois 拡大でない.

(5)  $L$  の  $\mathbb{Q}$  上自己同型  $\sigma$  は  $\sqrt[4]{2}$  をその共役に移す. よって  $\sigma(\sqrt[4]{2}) = -\sqrt[4]{2}$  または  $\text{id}$  の何れかである. すなわち  $G \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$  である.

(6)  $i\sqrt[4]{2}/\sqrt[4]{2} = i$  であるから  $i \in F$  である. よって  $F = \mathbb{Q}(\sqrt[4]{2}, i)$  である.

$\mathbb{Q}(i, \sqrt[4]{2})/\mathbb{Q}(\sqrt[4]{2})$  は二次拡大であるから  $[F : \mathbb{Q}] = 8$  である.